

第二十四回

# 二之丸 薪能



- 日 時 平成27年5月12日 (火曜日)  
開場午後5時 開演午後6時
- 会 場 松山城二之丸史跡庭園内特設能舞台
- 雨天時 松山市民会館中ホール  
開演午後6時30分
- 会 費 1,400円  
(文化協会会員1,000円・高校生以下700円)
- 主 催 松山市文化協会
- 共 催 松山市
- 協 力 (公社)愛媛能楽協会  
(公助)松山市文化・スポーツ振興財団
- 後 援 松山市教育委員会・愛媛新聞社・NHK松山放送局  
南海放送・テレビ愛媛・あいテレビ・愛媛朝日テレビ  
FM愛媛・愛媛CATV・えひめリビング新聞社  
ウイークリーえひめリック

## 薪能への招待 (能と狂言)

能とは

能面や美しい装束、地謡のコーラスや囃子でシテを盛り立て、古典的で幻想的な幽玄の世界を描きます。特に能楽師は能面を「オモテ」と呼び、曲中の人物に扮するための単なる仮面「道具」ではなく、演者が「オモテ」を掛け、全身全霊を面<sup>オモテ</sup>にかけける舞台でこそ、初めて面は命を得ます。

舞囃子とは

能一曲の中の一部分を、面や装束を着けずに地謡と囃子を伴い、紋付、袴姿で演じる略式演奏です。

狂言とは

われわれの身近な人物が登場し庶民のよろこびや悲しみ、おかしさ、おろかさを題材にいきいきと表現する笑いを中心にした対話劇です。

その時代の世相を活写した、その時代の現代劇と言えましょう。

鑑賞するには「松山城二之丸薪能を楽しむ会」の会費1,400円(文化協会会員1,000円・高校生以下700円)が必要です。  
会費は、入園時に集めますが、前売券も販売しておりますので、松山市文化協会事務局または各出演者までお問い合わせください。

<松山市文化協会事務局>  
松山市総合コミュニティセンター総合管理事務所内  
TEL:909-8008



あらすじ

木曾の山里の僧が、都へ上る途中、近江国(滋賀県)栗津の原までやってきます。そこへ一人の里女が現れ、とある松の木陰の社に参拝しながら涙を流しています。不審に思った僧が言葉をかけると、女は、行教和尚も宇佐八幡に詣でられた時「何事のおはしますとは知らねども、かたじけなさに涙こぼる」と詠まれたように、神社の前で涙を流すことは不思議ではないといい、ここはあなたと故郷を同じくする木曾義仲が神としてまつられているところであるから、その霊を慰めてほしいと頼みます。そして実は自分も亡者であるからといい残して、夕暮れの草陰にかくれてしまいます。<中人>旅僧は、里の男に、義仲の最期と巴御前のことを詳しく聞き、同国の縁と思い、一夜をここで明かすべく読経し、亡き人の跡を弔います。すると、先刻の女が、薙刀を持ち甲冑姿で現れ、自分は巴という女武者であると名乗ります。そして、義仲の討死の有様と、その時の自分の奮戦ぶりを物語ります。しかし義仲の遺言により一緒に死ぬことが許されず、形見の品をもって一人落ち延びたが、心残りが成仏のさまたげになっているので、その執心を晴らしてほしいと回向を願って消え失せます。

解説

修羅物の中でも、女武者を主人公とした唯一の能で、その点でも異色作です。普通の修羅物は、主人公が戦死をしたゆかりの土地に現れ、自分の討死した有様を語り、修羅道での苦患の様を述べ、旅僧に回向を頼むと言うのが定型です。ところが、この曲では、シテの巴は討死していません。自分が非業の死をとげた土地ではなく、愛する男が死んだ場所から亡魂が立ち去れず、一緒に死ねなかった執念・恋慕の情のため成仏しえないという設定は特異です。したがってこの曲は修羅物とはいいいながら幽玄の情緒を多分に含んでおり、雄々しい戦物語の底に流れる女の悲愁といったものを描き出さねばなりません。中人前、折からの夕闇に、名も名乗らず訴えるかのようにして消え失せるころの風情を大事にしたいものです。後シテも勇壮なうちにも哀れさを滲ませます。鮮やかな薙刀捌きで奮戦の様を見せるのが一番のみどころです。

巴に薙刀を持たせたのは、能作者の創意で「平家物語」には書かれていません。キリに一人の女性にかえった巴が愁嘆やるかたなく、甲冑に擬した唐織を脱ぎ、烏帽子、太刀を捨てて義仲の形見を胸にしようぜんとして去って行く後ろ姿には、鬘物の情緒がうかがわれます。

前シテが行教和尚の作として引いている和歌は、通常は西行法師が伊勢神宮に参った時の作と伝えられており、歌詞も「何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼる」ともっています。